

茶の湯文化学会会報 No.33

第33号 / 2002年 5月15日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://chanoyu.hoops.ne.jp/ e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

「鷺絵」と「珠光掛物」

戸田勝久

慶安元年（一六四八）の三月二十三日、松屋久重は、京都所司代板倉重宗の屋敷に呼ばれた。伝来の鷺絵を持参したらしい。この重宝を携行している状況証拠は、重宗の室礼と抹茶応接の仕方にある、と云ってよい。

重宗は、自らの居間（日常生活の場）に、久重を引き入れ、その床に一つの花入を置くだけでなく、板床にも花入を五、六個も配って、河骨（水草）藤など「色々花」を生けた。「白鷺緑藻図」の周辺を飾り立てる、という重宗の作意が知られる。

次に重宗の伝家の名品、持ち出しに対する謝意は、両種の御茶に籠められている。「茶通箱」の文字こそないが、この手前のはずである。（遠州流では、二個の茶入が用いられる）初めの御茶は、一昨年戌の年のもの、後の御茶は、当年の新茶「上様御心味」のそれだという。鼓吹の言葉も聞かれる。重宗は自ら初口を呑み、同席する五人の「御城衆」を差し置いて、「先鷺ノ絵へト」仰せられて、両度ともに、久重が二番とまった。

亭主重宗（五万石の大名の自室であるが）は、席中の秩序を乱してまで、久重の厚誼に報いようとしている。

る。たとい「東大寺鎮守八幡若宮神人の職」にあつたとしてもである。

この場合、久重を「鷺ノ絵」と呼んだのは、当時この呼称が、鷺絵の所有者である久重を示す、知られた習いであつたから、自然な響きもあり、かつは、実物が眼前にあるのだから「御城衆」を充分納得させたのだろう。

重宗は、この余勢を駆って、更なる無心を久重に持ちかけた。

珠光掛物写テ上セヨト被仰候
というのである。

久重が豊潤な松屋の文書をもとに編集した「茶道四祖伝書」（この命銘は、松山吟松庵のもの、熊倉功夫氏の補訂により、思文閣から復刊される）の中に、小堀遠州が久重に向かい（正保三年八月二日晩）、「珠光ノ筆蹟」について講釈をしたあとで、

其方ノ家ノ有ル間ノ宝物ニ成候程ニ可被成候、鷺絵ト掛替へする様ニ可致候
と申し渡したとされている。

そんな出来事があつてから、およそ二年が過ぎていく。重宗の茶道勉学は、相当な進捗をみせているよう

だ。末宗廣氏は、その稿本に、

石川丈山外風流の人との交わり広く「徳川実記」に寛永十六年七月三日参府の時西丸御庭の茶亭で三代將軍家光のために茶を点てて、面目を施し、文琳茶入を下賜され、更に慶安三年十一月晦日上京暇乞の時二の丸で点茶し「繁雪」肩衝茶入を下賜されたことが記されている。

金森宗和の茶にも数回招ぜられて居り茶交細やかであった。

と書かれている。この「繁雪」肩衝を「大正名器鑑」に徴してみると、「傳來」の項に、

慶安三年十一月晦日京都所司代板倉重宗上京の暇を告ぐに当たり、將軍家綱、二の丸に於て重宗を饗し、此茶入を賜ふ

となつてゐる。末さんは、両度共に重宗が將軍に茶を点てたようにされた。何れにしても、慶安の頃に、重宗の茶境は相当に深まっていた、と伺うことができる。六十歳代の前半に差し掛かっている。その人品が、

本書ハメクリ相アル物ナル間、先々写ラトノ事也

の発言となつた。「驚絵」は、持参させたが、この上「珠光掛物」とは、言わせなかつた。

末宗廣「茶人系譜」は、板倉重宗を採つて

を開催した。出席は理事十一名であつた。

十四年度の大会・総会については、これまで春・秋に分けて開催していた総会と大会を一連の行事として六月八日(土)、九日(日)に開催することにした。一日目に総会、講演会、懇親会を、二日目に研究発表とシンポジウムを催すことにし、講演会講師の一人は、戸田勝久氏に決定(紹陽生誕五百年に因み紹陽に関するテーマによる)、もう一人は永島福太郎氏に依頼交渉をすることになった。研究発表者は六名程度とし、シンポジウムは日本中国の喫茶事情に詳しい中国人研究者を発題者とし「日本と中国の喫茶文化の比較」をテーマに行うことを決定。

平成十五年度においても総会と大会を同時に開催することにし、平成十五年五月二十四・二十五日を候補日とすることにした。

研究会については、高橋副会長から八月後半に中国湖州市で陸羽茶文化研究会と共催で研究発表会(近辺の茶文化関係旧跡の見学も行う)を開催する案が出され、了承された。また、小泊副会長から来年二月頃に茶学および茶業関係の学術団体との静岡での共同開催が提案された。

例会は、従来の東京、近畿、高知例会のほ

くない。「驚絵」と「珠光掛物」への理解、執心から見ると、茶の上で小堀遠州に近接するのではないかと、と思つた。

熊倉功夫氏の「小堀遠州の茶友たち」(大正書房刊)を辿ると、「茶友」五十人の中に、重宗がいた。「遠州口切帳」の五十余会のうち、六度参会しているとのことである。また、遠州の官、伏見奉行は京都所司代の管轄下であれば、両者の関係は公私ともに緊密であつた筈である。

遠州が、家の宝物にせよ、と強く論じたにも拘わらず、「珠光掛物」は、久重の孫、源之丞久充の代に、鴻池道徳に譲渡された。この譲状の写真が、昭和十一年八月刊の「茶道」全集巻の五、に掲載されている。これには、西堀一三氏の翻字も併記される。

この書状に言及されたのは、管見だが、永島福太郎氏の他にない。茶道古典全集第三巻(昭和三十五年十一月刊)「珠光古市播磨法師宛一紙」の「解題」の中で、

いつごろ、松屋から他に譲つたのかは不明である。

としながらも、書状に言及されて、松屋が類火に遭い、屋敷の再建の為に「珠光掛物并台子」を譲渡する内容をとらえ、

か、新たに愛知・三重・岐阜をエリアとする東海例会を発足させることが戸田副会長から提案された。

東京例会は、五月二十五日に開催のほかは未定、近畿例会は、九月頃に八幡市の松花堂関連施設の見学を予定し、煎茶会への参加や若手研究者の発表会を計画する、高知例会は「土佐藩の茶道について」「茶事と茶会」「尾戸焼の陶工たち」「森田久右衛門日記(三)」のテーマによる研究発表会を予定といった案が提出された。

会報は年度内に四回の発行、会誌は夏前に第九号、来年三月までに第十号を発行する予定が示された。

決算・予算案については、次回の理事会で第二次案が提示されることになった。

第三回理事会で名簿検討委員会に付託されていた事項について、戸田副会長より報告があり、名簿は全会員に載せてもよい項目(氏名を含めて)をアンケートで確認した上で作成し、全会員に配布することになった。学生会員の会費、会誌の頒布価格については、引き続き検討することになった。

松屋が類焼したのは、宝永元年(一七〇四)四月十一日の奈良大火らしい。

と考証された。この年相手方の道徳は、五十歳で整合している。只、書状の日付「卯月三日」は、廿三日の廿が誤脱したのでは、とされたのだが、久充の混雑ならはともかく、昔の写真ではあるが「卯月三日」は動かない。

この疑念は、いま一応措いて、私は、鴻池道徳が書写した「珠光掛物」を所持している、既に、昭和六十一年の「淡交増刊号」「茶会記に学ぶ」に、発表している。また最近、奈良松源院の泉田宗建師が「禪文化」一八四号に「村田珠光」私見(一)として、関聯原稿を執筆されているし、私も同誌上に稿を改めることにしている。

私の目標は、只一つ、「珠光掛物」という侘茶創生の根幹に関する最重要文書が、いつまでも、「京都平瀬家蔵」でまかりとおおり、研究者が、本体を実見し得ないでいる、この不条理の解消にある、と云つてよい。

平成十四年度第四回理事会

平成十四年三月三十日午後五時より、池坊短期大学第二会議室で本年度第四回の理事会

第十六回研究会

平成十三年度最後の学会行事として四月十三・十四日の両日にわたつて第十六回研究会を佐賀県唐津市、鎮西町にて開催した。

本学会が九州の地で行事を催すのは初めてのことであつたが、初夏を思わせるような好天のもと予想以上の人数の参加を得た。

初日の研究報告は唐津市市民会館中会議室にて行い、五六名の参加者を数えた。

担当の日向進理事の開会の挨拶に続き、名護屋城址の発掘にあたられ、今回の研究会の眼目でもある「名護屋城上山里丸」で検出された「草庵茶室」遺構の発掘調査をされ、現在は佐賀県教育庁文化課に所属の五島昌也氏から「山里丸の草庵茶室」、休憩をはさんで名護屋城址発掘調査及び、復元事業を現場で直接指揮されてこられ、現在もその任におられる佐賀県立名護屋城博物館の高瀬哲郎氏から「肥前名護屋城の実像」という二本の研究報告をしていただいた。各研究報告の要旨は次の通り。

名護屋城の上山里は、東西約三〇メートル、南北約一七メートルをはかる、ゆるやかな傾斜地に立地する、「山里」遺構の唯一のものである。確認された遺構は、飛石・中門跡・玉石敷・井戸跡・堀立柱建物跡などであり、肥前名護屋城図（屏風）「からして、この堀立柱建物跡は茶屋跡と考えられる。茶屋跡は二・二五×二・七メートルの広さで、左右に張出部分をもち、垣根に囲まれていた。山里丸の秀吉の御殿跡から延びる飛石は一直線に配置され、現今の露地のものと



は様相が異なる。しかし実際にその上を歩いてみると大変歩き易いものであった。この茶室跡についての唯一の記録である「宗湛日記」とこの遺構を比較すると、日記中の「山里の座敷」の記述と一致し、本遺構が山里の茶室と確定できたのである。

この一郭が茶のための空間として造成され、定型化される以前の桃山期の茶室空間唯一のものであり、しかも一回限りの使用であったと推定される（以下遺構のビデオ上映により具体的説明）。

肥前名護屋城の実像

高瀬 哲郎

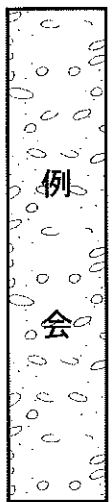
肥前名護屋城は天正二〇年三月に始まる文禄・慶長の役（壬辰・丁酉倭乱）において豊臣秀吉により築かれた軍事的拠点である。名護屋城跡一七ヘクタールの広さをほこり、これを中心として半径約三キロメートルの範囲に諸大名の一三〇カ所の陣屋跡が確認されている。この陣屋配置には当時の人間模様が反映され、羽柴延俊、前田利家という秀吉に身近な武将は近くに、徳川家康のそれは遠くに配置されている。強調しておきたいのは、この城が日本を代表する城郭ではなく、秀吉の



個性により造られた城であることである。山里丸と城下町を隔てる堀には底に出島が築かれ、水上舞台が設けられていたと考えられる。しかも城下より低位置にあり、「見せる」という秀吉の意志がそこには働いているように思われる。これ以外にも様々な秀吉の意志がここには働いており、石垣、城郭としての脆弱性など謎が多い（以下スライド四十六枚を映写し、懇切な解説があった）。

二日目の見学は、まず鎮西町にある佐賀県立名護屋城博物館の展示を見た後、高瀬哲郎氏の案内で、名護屋城の三の丸址から本丸

址、そして山里丸址を見学した。昼食後唐津に戻り、唐人町の御茶屋窯跡、中里太郎右衛門氏陶房を見学し、唐津駅前で解散した。



近畿例会

第十三回近畿例会を一月十九日（土）午後二時から池坊短期大学で、第十四回の近畿例会を三月三十日（土）午後二時から池坊短期大学において開催した。

第十三回は、従来通りのシンポジウム形式によるもので、茶の総合的研究を目指すもの。発題者に、小西茂毅氏、小川後楽氏、谷晃氏を迎えた。様々な問題提起がなされるとともに、会場からも活発な意見提出がなされた。

第十四回は昨年度から開催している若手研究者による研究発表で、二人による研究発表がなされた。

一月十九日（土）

抹茶文化と煎茶文化

谷 晃

抹茶と煎茶はかなり違うが、一つには始ま

りの歴史的な違いがある。十八世紀初頭に家元制度が確立しその家元制度のもと抹茶世界が再編成され、そのころに煎茶が盛んになっていく。両者の違いの中には、煎茶成立期の抹茶のそういった姿に起因するものがあるのではないか。

煎茶の中に抹茶批判がある。清潔ではないとか、茶器を驚くほど高価に売買するとかに対する批判がある。さらに、家元制度の確立と関係があるのだが、抹茶を楽しむためには必ずしも必要ではない些末な規則や手前を体系づけていくことにたいする批判もある。これは、抹茶の一つの理念とされてきた「わびすき」の結果かどうか疑問が残る。「わびすき」の受け取り方が変化し、拡大解釈がなされてきた結果なのではないか。「わびすき」が今の茶の湯の中にどう生きているのかを考えていく必要がある。

また、抹茶が煎茶の批判を浴びることになった原因の一つとして、「わびすき」の中の重要な要素である風体論が抜けていきつつあったことが考えられる。遊びと修行という葛藤の中で、禅を主体とする修行が強調されたために、かえって遊びにふれてしまったのではないか。

小川 後楽

清潔や清風など、煎茶で好んで使う言葉には「清」という字がついている。これは煎茶を象徴的に表すキーワードである。「清」の概念は道教の概念。私の庵号を三清庵というが、三清も道教の最高神を示し、その神がすむのも三清である。抹茶が禅に結びついたのに対し、煎茶は道教に結びついた。清風は単なる涼しい風ではなく、純粹であるとか、透き通っているとかがいった意味がついてまわる。煎茶には、荘子のとらわれのない生き方や、道教の現世的な考えのなかの現実批判が反映している。

煎茶の代名詞である清風の茶には、廬全の茶歌が大きく影響している。煎茶精神の原点と考えられるのは、この茶歌の存在である。廬全は清廉実直で、茶歌は廬全の真実の吐露を示している。お茶の特性を詩文で表現しているだけでなく、後半では、茶を賛歌し、また弱者に関して為政者に向かって反省の問いかけもしている。この清風が茶歌以後煎茶の重要な概念になる。売茶翁高遊外の名も道教的で、茶歌に影響を受けている。茶旗に通仙、清風の文字を見いだせるが、廬全からの影響の大きさをしめす。煎茶は、煮出しエキ

スを飲むすんだ茶、清茶である点で、大いに抹茶とは異なる。

小西 茂毅

茶の品種と内容成分の推移を調べた。榮西がお茶をもたらしてからお茶は流れてきているのか。茶の味は滋味で表す。茶の品評の審査項目の中に滋味がある。お茶の味を表すよい言葉であると思う。体に滋養があつてしかも美味しいという意味を示す深い言葉である。元は滋の方にウエイトがあつたものが、抹茶の発展に伴つて味のほうにウエイトがかつていった。

主に覚醒作用のために飲まれていたものが、茶人が味の方を進化させ、いいものいいものをということで被覆栽培が行われるようになった。また肥料が必要となり、菜種かすの供給が考えられ、都市近郊農業的に発展した。茶の年貢の取り立ても厳しく、対応のため技術も発展した。光の量を調整し色のよいものを作り出すことに成功することにもなる。

煎茶宇治製法が永谷宗円により完成し、山本嘉兵衛により玉露が制作され、味を重視する方向に向かう。はじめは病気に強い茶を求めたが、次第にアミノ酸の多い美味しい茶を

求めるようになった。品評会で入賞するものもアミノ酸が多い。煎茶も抹茶のようなものを追っている。

これからは多様化を目指すべきで、品種改良で違う指向性を持ったものを作り出すべきである。若い消費者の審査による現代の指向性にあつた茶を作る必要もある。

三月三十日(土)

「田能村竹田と煎茶」考

松阪富美子

竹田と煎茶といえば、文人との交遊が思い出されるが、竹田個人と煎茶の関わりはどのようなものであつたのだろうか。竹田個人と煎茶との関係の特徴付けるものを詩文や書簡に見ていくと、まず、虚弱体質と眼病を患つていたことが挙げられる。病弱であることから静かな時を過ごすことが多くなり、そのことが竹田と煎茶を強く結びつけることになつた。また、後半生、毎年のように船旅をしているが、船中生活のために煎茶道具を伴い、喫茶を楽しんでいる。竹田はこれにより、憧憬する中国文人の陸龜蒙や林逋と同じ経験をしているのだ、という喜びを感じていた。五十一歳の長崎遊学では、中国人や長崎の人々

総会・大会のご案内

すでに別便でご案内しているとおり、六月八日(土) 九日(日)の二日にわたり総会・大会を開催します。会場は池坊短期大学(京都市下京区四条室町西)です。若葉の季節は過ぎたとしても京都が美しい時期です。ふつにご参加ください。

第一日(八日)

総会 十三時三十分

講演会 十五時

「紹陽の袋棚その後」

―杉木普齋の紹陽棚伝書― 戸田 勝久氏

「珠光雑談」 永島福太郎氏

懇親会 十七時三十分

第二日(九日)

研究発表

第一部(十時三十分～十二時)

「茶の湯による陶冶」 川名雄一郎氏

「片桐石州の交流関係」

―茶会記の分析結果を中心に―

八尾 嘉男氏

「近世の茶の湯にみる「借覧」について」 木塚久仁子氏

と接し、中国の喫茶法を行っているのを目の当たりにする。その時、売茶翁の喫茶法が中国の喫茶法とは異なるものであることに気が付き、後に煎茶書出版することになる。この書は、後世の煎茶書に大きな影響を与えた。

竹田は始め茶の湯を嗜んでいたが、徐々に煎茶に傾倒していく。比重は明らかに煎茶の方へ移行するが、しかし、茶の湯の席にも出なくなるのか、あるいは茶の湯を否定してしまうということはなかった。竹田は、煎茶も茶の湯もどちらも古代中国を源とする大きな喫茶文化の流れのなかにあるもの、という大きな考え方をもっていた。

伊集院兼常の建築と茶の湯

矢ヶ崎善太郎

黒田天外の『江湖快心録』によると、伊集院兼常は鹿児島門閥家の出で、藩主島津斉彬公に見込まれて特に建築の道をこころざし、藩関係の仕事をいくつか手がけた。東京で官内省や海軍省、工部省に出仕した後、官を辞して会社を設立、官家の御殿や上野博物館など多くの建築に関わり、自宅も十数か所営んだと伝える。庭師・植治は作庭術を身につける上で伊集院兼常から多くのことを学ん

(昼食・休憩)

第二部(十三時三十分～十五時)

「千道安の茶の湯とその評価」

中村 修也氏

「武野紹陽と中世・近世茶の湯スタイルの確立過程―考古学から―」 森村 健一氏

「最近のてん茶技術」 村上 宏亮氏

シンポジウム(十五時十五分～十七時)

「日中茶文化研究の展望」

藤軍(東君)氏・関剣平氏・張建立氏

趙方任氏(司会) 高橋忠彦氏

例会のご案内

東京例会

次の日程で開催します。会場は東京芸術大学(東京都台東区上野公園)です。ふるつてご参加ください。

○五月二十五日(土) 午後一時から

「茶譜」にみる宗旦

東海例会

すでに理事会報告にあるように新たに東海例会を開くことになりました。相談役には、

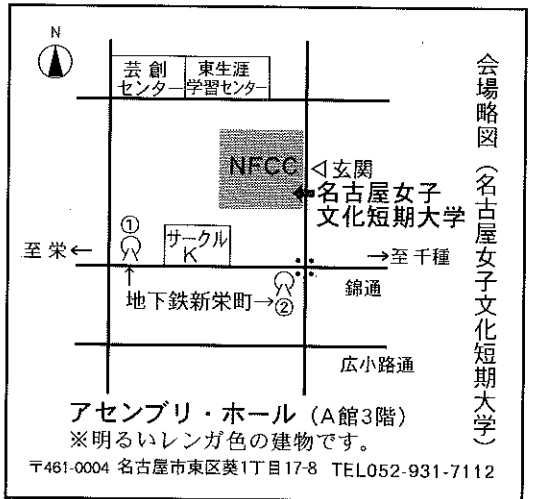
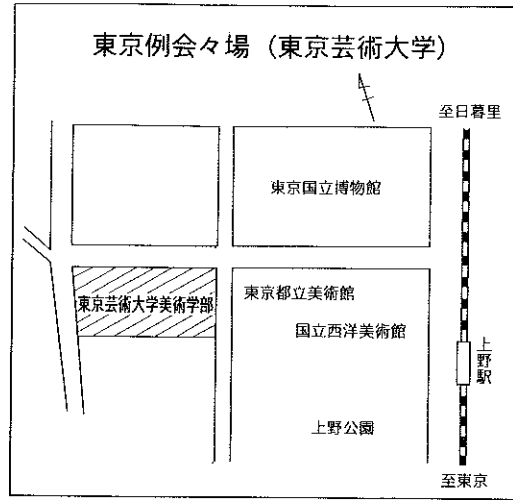
戸田勝久副会長のほか、橋本実理事、谷見理事

事があたり、神谷昇司氏、佐藤豊三氏、神崎

だと述懐しており、近代庭園の発展にも伊集院が大きく貢献していた可能性がある。山縣有朋の書簡に伊集院との関わりを示すものはいくつか残されており、伊集院は建築の専門家として山縣に協力し、庭園談議を交わしていたこともわかる。『建築雑誌』や『江湖快心録』に伊集院の建築観、庭園観がうかがえる記述がある。それには伝統を重んじる姿勢が一貫しており、特に庭園については自然にならうと天趣(道理)を求めていた。伊集院は裏千家十三世田能齋を支援し、裏千家の活動を後援した茶人でもあった。刊行されている近代の茶会記録には益田鈍翁や高橋箒庵といった近代数寄者のリーダーとの関わりが記録されており、彼らのよい茶友であったことがわかる。依頼されて茶室や庭園をつくることもあった。東京住であった伊集院が京都で営んだ別邸が二か所確認できる。そこには古写真なども残されており、それらから伊集院の建築、庭園の作風を知ることが可能である。伊集院兼常は近代の建築史、特に茶室や庭園といった数寄的な空間の展開をみる上で特に注目すべき人物である。

かず子氏が担当します。会場は名古屋市の名古屋女子文化短期大学です。特に東海地区の会員の皆様のご参加をお待ちしています。なお、会員の参加は無料ですが、会員以外の方からは資料代をいただきます。

○五月三十日(木) 六時三十分～八時三十分
尾張徳川家の紹陽名物 佐藤 豊三氏
玄々齋と松阪の茶の湯 戸田 勝久氏
○七月二十六日(金) 六時三十分～八時三十分
尾張の茶人と茶風 神谷 昇司氏
尾張の陶工とそれを支えた人たち 神崎かず子氏



役員役割分担

会務	谷 晃 (代表)	赤沼多佳
会誌	筒井絃一	日向進
(編集委員)	中村利則 (代表)	熊倉功夫
	谷 晃	戸田勝久
会報	日向進	
	影山純夫 (代表)	谷端昭夫
	中村利則	美濃部仁
大会・研究会	日向進 (代表)	影山純夫
	小泊重洋	高橋忠彦

後記

竹内順一 田中秀隆
谷 晃 戸田勝久
名見耶明 堀内國彦

*すでにお知らせしたとおり、これまで分けていた総会と大会を春纏めて開催することになりました。二つの会に参加しやすいようにとの考えから纏めたものですが、秋の大会に報告を予定された方にはご迷惑をおかけしたかと思えます。お許しください。

*四月の唐津・鎮西での研究会は、多くの参加者があり、好評裏に終わりました。名護屋城博物館の高瀬さんには、二日にわたり大変お世話になり感謝の気持ちで一杯です。天気も良く、問題はなかったと思いますが、黄砂のため老岐が見えなかった事と呼子で海産物を買えなかったことが心残りであるとされる方もおありかも知れません。

*遅くなりましたが、役員役割分担をお知らせします。このほか戸田、小泊、高橋の各副会長には、それぞれ会員増加、総合研究、対外交流を担当していただくことになりました。皆様のご協力をお願いします。